The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞ Tim Cross, ”The Ideologies of Japanese Tea : Subjectivity, Transience and National Identity”, Global Oriental Ltd., 2009
Author(s)	大和田, 範子
Citation	年報人間科学. 2011, 32, p. 249-254
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12314
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈書評〉

Tim Cross
The Ideologies of Japanese Tea:
Subjectivity, Transience and National Identity
Global Oriental Ltd., 2009

大和田 範子

はじめに

異文化交流の中で、日本の茶は外国でどのように理解されているのであろうか。海外から他国の文化を知ろうとするとき、彼らはどのようなきっかけから異文化を学んでいくのか。グローバル化の現代、異文化は身近な存在となっている。異文化理解の過程でおきるさまざまな文化摩擦を彼らはどのように解決していくのだろうか。

Tim Crossの *"The Ideologies of Japanese Tea": Subjectivity, Transience and National Identity*（Global Oriental Ltd., 2009）はまさにこの点に焦点を当てた本である。この本は全十章からなり、第一章と第二章以降は全く違う視点から茶道を分析する。この本の特徴は、茶道の中に二面性を見出し、茶道を通して異文化を理解する点である。そのきっかけが岡倉天心の『茶の本』であり、全てはここから始まったと述べる。

著者 Tim Crossはオーストラリア東部出身で、１９８０年代後半にサーフィングビーチから九州福岡に来日し、茶道経験が二十年の経歴を持つ。彼の回想によると、来日時は茶道についてそれほど興味を持っていなかったが、実際に茶道に触れてすっかり魅了されたという。日本に来て二年後、彼は茶道とは純粋な文化であること、また十六世紀の「侘茶」の完成者である千利休（1522-91）は、政治経済には全くかかわりのない単なる唯美主義者であった、というこの二点に気づいたと述べている。ではなぜ純粋に美学を追求する日本伝統文化の茶道が、政治・国家と結びついてきたのか。これがこの本の隠されたもうひとつの主題でもある。

1．異文化へのアプローチ

未知の世界へ入り込み、異文化に触れる感動がこの本の第一章から伝わり、さらにその後の章では文化と国家・権力とのつながりへの分析がそれと平行して行われる。ここでは著者の感じた異文化交流でのギャップこそが異文化へのアプローチとなる。

第一章 What is Twenty-first Century Tea? で彼は、日本での茶道の経験を生かしてその魅力を読者に紹介する。ここでは現代の博多の茶道が、「暁の茶事」という極寒の早朝に行われる茶事を通して事細かに表現されており、「和・敬・清・寂」の世界をありありと思い浮かばせる。

2．異文化としての茶道

第二章 Inventing the Nation: Japanese Culture Politicizes Natureでは、一転して茶道と権力に焦点を移し文化と国家との関係を分析し、文化としての茶道がどのようにして戦争時の国家権力と結びついていくかに焦点があてられる。

a．文化・茶道・花・桜・美しい・散る・はかない・命・死・戦争・国家

茶禅一味といわれるように茶道は精神性を重んじ、生死をかけた場での茶は「生」であった。茶道は総合的に文化を取り込み、身体動作までも洗練させた藝術であり、創造する文化形態である。この文化的な茶道がどのようにして国家権力とつながるのかを、日本の古典文学から探り、その中で日本人の「花」に対するイメージに注目し、茶室の床の間空間での「花」が、古典文学に存在する「美しい」「散る」「はかない」「命」へと連想させると分析する。そこから言葉としての「桜」にたとえ、「花吹雪」「花いかだ」のような「散る」または「散った」風景を美しさと捉える日本的風情をも、「死」に発展させていく。

第三章 Lethal Transienceでは、日本の美とされる「桜」が、国家、戦争へとつながることを著者は証明していく。具体的にはまず花の中で特に「桜」が明らかに神聖な「花」であったこと。次に戦争時と1990年代における「桜」のイメージについて比較を行い、「花」と日本人の関係を政治的に捉え、小泉政権時代、バブル、裏千家十五代家元を例に挙げて具体的にその動きを述べている。

第四章 Japanese Harmony as Nationalism: Grand Master Tea for War and Peaceにおいては、国粋主義の茶のあり方を述べ、戦争時に茶道の家元がどのように権力と国家に関わったかについて、千家茶道の頂点に立つ家元の権力を中心に明らかにする。具体的には1937年発行の『国体の本義』にもとづいて日本国民の天皇への従属を強く唱え、いかに日本人が戦争に向かって強化されていったか。そこで国民を統一していく過程における茶道の関わりを批判的に分析する。

第五章 Wartime Tea Literature: Rikyu, Hideyoshi, and Zenでは、利休の存在について述べられる。三千家が利休に関わる行事を行うことで、常に歴史上の人物を日本人に意識させ、歴史伝統がいかに茶道に価値を持たせているか、また豊臣秀吉と千利休の関係を、京都の北野大茶会を通して明らかにし、茶道とつながる千利休や秀吉といった歴史的人物の存在を国家が利用したとして、家元制度と政治の問題を分析する。全てが戦争へとつながる要素となり、歴史的英雄と茶道との関係が深く絡み合

う構造を批判的に解明する。

b. 家元

第六章 Grand Master: *Iemoto* で彼は、家元と権力を歴史的事実にもとづいて述べ、国家との関係をあきらかにする。川端康成の小説『千羽鶴』を例にとり、家元制度への疑問を分析する。

第七章 Tea Teaching as Power: Questioning Legitimate Authorityにおいては、茶道の教義の影響、そしてこれによる日本人の伝統への回帰が家元制度を支えているとし、さらに現在の裏千家家元制度の国際的な成功に焦点をあてる。

千家茶道の家元制度は、江戸時代に創設されたもので、茶道の流派の頂点に位置し、千利休の子孫として現代まで続いている。日本では他の伝統文化にも家元は存在し、自己の流派を守り、技術を伝える役割を果たしている。家元への反発については、過去の華道界を例にとり、そこでおきた家元制度についての内紛が、ここでは例外のように述べられている。

c. 映画という媒体：時代劇・歴史映画

第八章 Teshigahara's Rikyu as Historical Critique: Representations, Identities and relationsで彼は、映画が果たす茶道のイメージづくりへの批判を時代劇、歴史映画から行う。伝統文化と国家の結びつきは映像により更に強固になる。つまり映画は民衆の深層心理に作用し、映画の作り手による民衆への心理操作を行うことができる。これは世界共通であり、映画という娯楽の名の下に民衆が容易に洗脳されていく危機感を述べる。特に日本は明治維新まで、生活習慣が西洋とは全く異なっていたため、時代劇、歴史劇は過去へのノスタルジーとなって日本人に盛んに受け入れられた。現代と過去をつなぐ映画は空想の中に理想を描くことができ、国家戦略としての役割は大きい。

第九章 Lethal Transience as Nationalist Fable: Kumai Kei's *Sen no Rikyu: Honkakubo Ibun*においては具体的に映画の中に人物が描かれ、歴史映画の中に意図を持って作り上げられた利休像が、現実に受け継がれている現代の茶道と重ねあわされ現実味を増していく中で、民衆を操る役目を担う映画への批判がここで行われている。

戦争という非常事態の中でいかに勝利するかを考えたとき、国民の心を瞬時に捉えることができるのは、娯楽として製作される映画産業であり、国家の狙いはここにある。これらの点から、著者は実在した歴史的人物の千利休とその子孫である三千家、家元への戦争時における動きに対して批判を強める。

d. 現代社会における茶

最終章の第十章 National Identity and Tea Subjectivitiesでは、最新の日本のテクノロジーが飛躍的に発展した中で、旧式と思われる伝統文化の技術が、基本的な面で依然として日本人の生活文化を支えており、新旧のこの二重構造から日本人の現代性を見抜こうと試みる。さらに著者にとって日本人の不可思議さを解明するために、他世界との異文化比較を行い、自然に重きをおき融合していく伝統文化としての茶道の存在を問

う。

日本において、豊潤な伝統文化である茶道を通して守り抜かれた価値観が存在し、一方ではプラスチックという無機質な物質から生みだされたクレジットカード等の登場で、文化をも時間を切り刻んで購入するという価値観が存在する。このような過去と現代が交叉する中で、テクノロジーの発展により文化という抽象的な価値観が、現実的な価値観に変化するという点に著者は疑問と警告を発する。歴史の流れから考えて日本人から見れば当たり前である現象が、外国人の異文化理解においてかなり難しい存在であることが著者の異文化摩擦への疑問から浮き彫りになり、彼らがどのように異文化に対処しようとするのかがここでは述べられている。

かつて岡倉天心が西洋に対する東洋文化を『茶の本』を通じて主張し西洋を驚かせた。彼が日本の将来を文化国家として登場させることに全力を傾けこだわった文化の重みとは、一体何であったのか。これからさらに広がりを見せるグローバリゼーションの中、文化に対する日本国民の自覚はどこまで変化していくのか、また茶の存在の行方はどうなるのか。外国人の視点から見た日本の近未来のあり方についての著者の問いかけは続く。

おわりに

異文化交流の中で日本の茶が、外国からどのように理解され、受け入れられていくのかをこの本を通して見てきた。岡倉天心の英文著書『茶の本(1906)』から影響を受けて茶道に興味を持って書かれたというこの本から、約100年後の現在に異文化理解の一つの結果として、『茶の本』からの著者の反応が、ここに反映している点は興味深い。

著者は、異文化理解と平行して国家権力への追及をこの本の底辺においており、その点から分析する「生」と「死」についての彼の解釈は過激であり一方的であるとも思える。第一章で見られる平和的な茶の世界は、第二章から一転して冷酷な戦争へのかかわりへの分析として変化する。この急激な表現法は、異文化を理解しようとする読者にとっては刺激的であり、その後の展開は期待されるものとなり、読者の興味は増す。それも読者をひきつける著者の戦略とも思える。

しかし伝統として日本人の心の奥底に存在する日本人らしさが、著者が分析するようにそう簡単に変化するものなのか。生活習慣の中に存在する伝統は、うわべの刺激をいくら受けたところで習慣がすぐに変わることはないように、途切れることはない。茶道の中で変化を伴いながら受け継がれてきたということは、もはや茶道は日本人らしさを表現しているのであり、柔軟に時代と共に存在してきているのである。

また茶道における日本の「稽古」について、特に外国人の初心者にとっては理解に苦しむところであろうが、第一章では著者の過去の経験から、日本人が紹介するより実際的で理解しやすく書かれているように感じる。しかし外国人の正確な異文化理解というものがはたして可能であるのだろうか。

グローバリゼーションが進んでいく将来、自国の文化主張は必要であるが、どこまで主張が可能であり、どこで異文化と融合すればよいのか。このように異文化の充分な理解は手探り状態である。しかしこれがまさ

に異文化理解であり、これからますます重要な問題として取り上げられるようになるであろう。

以上伝統文化の茶道が外国でどのように理解されているのか、またどのようなきっかけで彼らが異文化を学ぶのか、という疑問に対して考えてきたが、まず茶道の異文化理解については、外国人の視点から茶道の二面的解釈を生みだし、そこから強引とも思える異文化分析を行ったという点で斬新であり、また異文化学習のきっかけが、日本の動乱期である明治維新を背景とするコンフリクトの中で、西洋を強く意識して書かれた岡倉天心の『茶の本』であるところから、西洋人である著者がどのように『茶の本』から異文化としての日本を捉えようとしたのか、その反応が伝わってくる点は興味深い。さらにその異文化理解の過程では、読み進める中で具体的な例を挙げながら、外国人の視点を明らかにして異文化摩擦を解決していく様子を、読者にも共に実感できると納得させる、説得力のある言葉で表現しているところ等、これら三点から考えてみてこの本は一読する価値のある本だといえる。